

大田区立龍子記念館

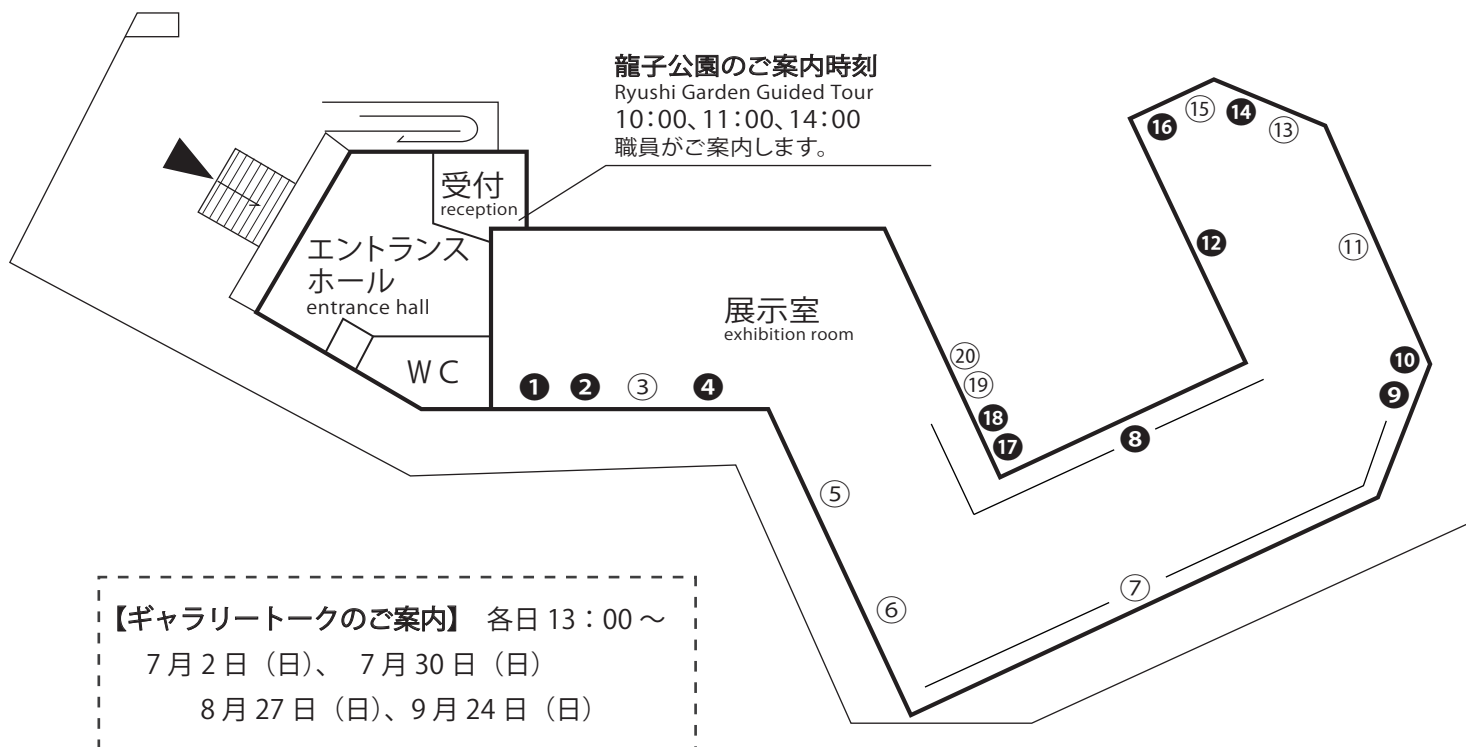
名作展「絵画への意志 新規収蔵品からの展望」

平成29年6月23日(金)～10月15日(日)

Ryushi Memorial Museum

Ryushi Kawabata Exhibition "New additions to the collection"

June 23, - October 15, 2017



展示作品

作品名	Title	制作年/年齢	サイズ(縦×横)	形状	出品展
①「賭博者」	Gamblers	大正12年(38才)	84.7×116.7cm	絹本彩色・額	再興第10回院展
②「白日夢」	Daydream	大正8年(34才)	167.0×168.4cm	絹本金地彩色 屏風二曲一隻	新代邦画展覧会
③「伊豆の國」	Province of Izu	昭和16年(56才)	251.0×191.0cm	紙本墨画淡彩色・額	第13回青龍展
④「大和の國」	Province of Yamato	昭和17年(57才)	192.7×253.5cm	紙本墨画淡彩色・額	第14回青龍展
⑤「霹靂(はたたく)」	Peal of Thunder	昭和35年(75才)	243.6×728.0cm	紙本彩色 額装六枚一面	第32回青龍展
⑥「伊豆の霸王樹」	Cacti in Izu	昭和40年(80才)	243.0×484.0cm	紙本彩色 額装四枚一面	第37回青龍展
⑦⑧「逆説・生々流転」および下図	Flow of Life —A Paradox	昭和34年(74才)	48.3×2,806.1cm	紙本墨画淡彩色 額装八枚一面	第31回青龍展
⑨「梅と翁」	Plum Tree and Old Man	制作年不詳	113.0×125.1cm	紙本彩色・額	
⑩「日光杉並木」	Cedar Avenue of Nikkō	昭和30(70才)	98.5×48.0cm	紙本墨画淡彩色・額	第5回連作奥の細道 点描展
⑪⑫「椰子の篝火」および下図	Bonfire of Palm Leaves	昭和10年(50才)	242.4×727.2cm	紙本彩色 額装六枚一面	第7回青龍展

大田区立龍子記念館 Ryushi Memorial Museum

名作展「絵画への意志」平成29年6月23日(金)～10月15日(日)

Ryushi Kawabata Exhibition "New additions to the collection" June 23, - October 15, 2017

作品名	Title	制作年/年齢	サイズ(縦×横)	形状	出品展
⑬⑭ 「百墓図」 および下図	Hundred Toads	昭和38年(78才)	148.3×71.5cm	紙本彩色・額	第31回春の青龍展
⑮⑯ 「寒泳」 および下図	Midwinter Swim	昭和39年(79才)	123.9×79.2cm	紙本彩色・額	第22回青々会展
⑰ 題名不詳 (赤焼けと山と民家)	Title unknown (Red burning sky, Mountain and House)		167.0×77.5cm	紙本彩色・額	
⑱ 「かっぱ弁天」	Benten(goddess of arts and wisdom) of Kappa	昭和35年(75才)	109.0×86.5cm	紙本彩色・額	第3回西国巡礼余恵展
⑲ 「松山城」	Matsuyama Castle	昭和20年代	141.4×70.4cm	紙本彩色・額	
⑳ 「風神」	Wind God	昭和20年代	137.4×69.6cm	紙本彩色・額	

ほか展示作品関連スケッチ6点 計26点

展示解説

■生涯をかけて取り組もうとした「國に寄する」連作

当館では「國に寄する」連作を構成する《伊豆の國》(昭和16年)、《大和の國》(昭和17年)、《越後(山本五十六元帥)》(昭和18年)、《怒る富士》(昭和19年)を所蔵しています。「國に寄する」について朝日新聞(昭和16年8月29日「川端画伯“彩管報國”の発願」)では、「生涯を賭した大連作」と報じられています。というのもこの連作で龍子は、青龍展への毎年の出品を通して日本六十余州を描きあげようという意志を示したからです。それまでも8年にわたって龍子は、日米関係の悪化や日本の委任統治領等をテーマにした「大平洋」や日中戦争の際に軍の囑託画家として訪れた中国の印象を描いた「大陸策」といった連作を発表しています。終戦とともにこの連作は断念されますが、太平洋戦争に突き進む時代において、海外から国内へと視点を移し、大連作によって日本各地を描こうという決意に、龍子の制作の大きな方向転換を見ることができるのではないのでしょうか。

■ほとんど残されていない龍子の作品下図

孫であり弟子の岡信孝は研究会で下図を見せたとき、龍子から「これを六尺に延ばせ」と指導を受けたと述べています。同様にほかの弟子たちも「絵を半分に切れたとか、逆さまにしろ」と言われていました(『三彩』昭和61年4月号)。そのため、龍子の作品においても、常識にとられない構図を下図段階での綿密な計算が繰り返されていたものと考えられます。しかし、弟子の福田豊四郎が回想するように、ほとんどの下図を龍子はたき火で燃やすなどして処分してしまっていたそうです。今回の展覧会では、残された数少ない下図と本画を比較できるように展示しています。試行錯誤の痕跡から、龍子の絵画への意志をぜひ読みとってみてください。

次回展予告

■川端龍子没後50年特別展「龍子の生きざまを見よ!」

11月3日(金・祝)～12月3日(日)

本年、龍子の没後満50年をむかえます。当館ではこれを記念し、特別展を開催します。画家の生誕地である和歌山の博物館・美術館ほか、生誕の地和歌山を中心に他館から50点以上の作品を拝借し陳列します。

○龍子のほか大観や玉堂の作品も出品

龍子作品のほか、龍子と交流のあった巨匠・横山大観、川合玉堂の作品や、旧宅内の持仏堂におさめられていた仏像も展示します。

○伝 俵屋宗達《桜芥子図襖》を複製

かつて龍子旧宅内の持仏堂を飾っていた伝 俵屋宗達筆《桜芥子図襖》の高精細複製を行い、特別展の会期初日から公開します。

作品拝借予定の館

ウッドワン美術館、海の見える杜美術館、桑山美術館、東京国立近代美術館、東京国立博物館、パラミタミュージアム、福井県立美術館、村上三島記念館、山種美術館、和歌山県立近代美術館、和歌山市立博物館、わかやま歴史館ほか(五十音順)